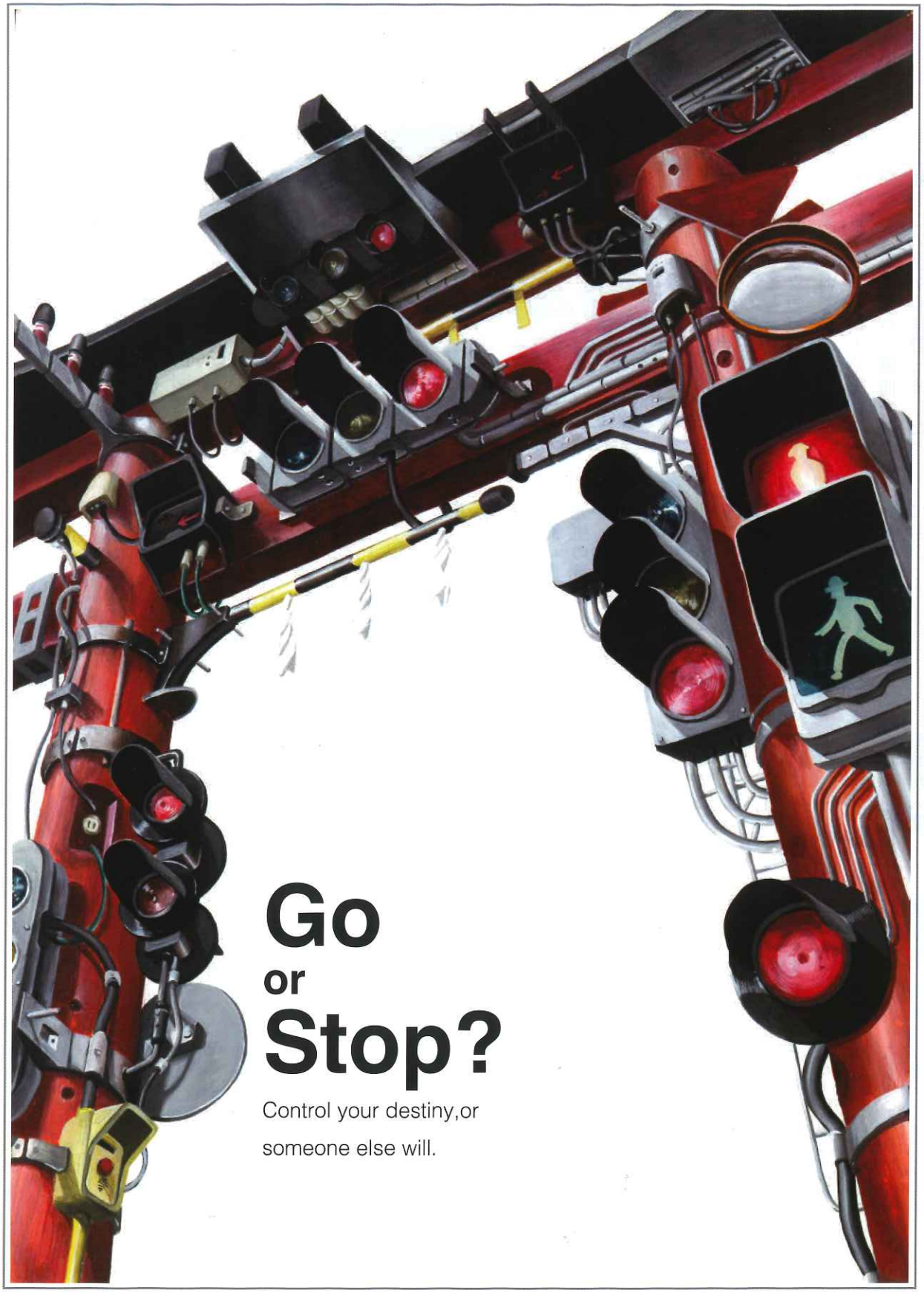
静岡大学教育学部同窓会誌

OHYA おおや

2017 VOL.60



Faculty of Education, SHIZUOKA UNIVERSITY

多様化する価値観とモラル

同窓会会長
杉田　豊
（昭和36年・中数卒）

ポピュリズムの台頭

日本は今、経済成長が低迷するなか、人口減少の進行と相まって高齢化が急速に進んでいます。医療費の膨張は止まるところを知らず、所得格差の拡大も取りざたされています。

世界に目を転じれば、各国の価値観に大きな変化が感じられ一抹の不安を感じます。このことを実感したのは、昨年秋のアメリカ大統領選です。衝撃の選挙結果でした。共和党のトランプ氏が勝利した時、マスコミはこの勝利を「戦後の国際秩序を揺るがす激震」と表現しました。

自由と平等、民主主義、法の支配、開かれた市場主義といった普遍的価値観を、国家として具現してきたのがアメリカでした。そうした価値観に反する発言を繰り返してきたトランプ氏が勝利したのです。

しかし、この動きに呼応するかのように、フランスやドイツでも「移民排斥」をあおるポピュリズム政党が支持を拡げ、東欧でもナショナリズムが勢いづいています。英国もEUからの離脱を決めています。

二冊の書籍

このような世相を反映してか、昨年暮れ二冊の書籍が話題になりました。「アウシュヴィッツの図書係」と「戦地の図書館」です。前者は、第二次世界大戦中、ユダヤ人であるがゆえにアウシュヴィッツ強制収容所に送られた少女が、禁じられていた読書を心の支えに生き抜いた物語です。「本」という新たな切り口でアウシュヴィッツの実態を提供してくれる貴重な一冊です。

全学同窓会名古屋地区交流会

ナチス・ドイツは兵士の読書を禁じ、発禁・焚書（ふんしょ）により一億冊を超える書籍をこの世から抹殺しました。逆に、米陸軍は兵士の士気と基地生活の質を向上させるために書籍に注目し、市民から寄せられた一億四千万冊を戦地に送り届けたといいます。「戦地の図書館」は、寄贈の経緯から本と兵士の関わりに焦点を当てて描いたものです。

この背景の全く異なる二冊が戦後七十年の今、改めて注目されているのは書籍の影響力と併せてグローバル化の波に逆らっての施策、すなわち自国第一主義的な「アメリカ・ファースト」や西欧諸国の「移民排斥」をあおるポピュリズム台頭への懸念ではないかと思います。

ルールとモラル

今年も静岡大学の入学式が、静岡市のグランシップで挙行されました。式後の記念講演は、児童文学者で同窓生でもある清水真砂子先生（ゲド戦記の訳者、昭和39中英卒）でした。先生の近著「大人になるっておもしろい？」（岩波ジュニア新書）に「ルールとモラル」について論じた一節があります。

先生は、「一人の人間としてこうありたいと思うことが、国家や社会が枠組みとして突き付けてくるもの（法令とか規則）とぶつかってしまう場合が往々にして出てくる。その時どうするか、なんですね」と問いかけ、さらに「規則は職場にも学校にもいつだってあって、それが人間として恥ずかしくなく生きたいという願いとぶつかってしまうことがある。人としての思いを通せば、コンプライアンス違反になってしまう」と続け、この矛盾を「人々は自分の中でどのように処理しているのでしょう」と問題提起しています。

昨今の日本社会はコンプライアンスの大合唱で、「ルールこそ大事」、「ルールさえ守っていれば、人間として何一つ恥じることはない。そう思っている人が最近増えていないか」と心配し、コンプライアンスは、本来obedience（従順）と同じ意味を持っていたと解説をしています。

さらに、人はルールを守るだけでいいのか。「批判なき真面目さは悪をなす」一つの例として「アドルフ・アイヒマン」をあげています。彼は「平凡な真面目な公務員で、ただ命令に従っただけで自分がユダヤ人殺害に関わっていたという認識さえなかった」ハンナ・アーレント著「イェルサレムのアイヒマン―悪の陳腐さについての報告」人物だからです。

その上で、極めて多忙であるにも関わらず「教師」の前に「公務員」ゆえに仕方がないといって声一つ上げない「平和時」の日本の小学校の先生が、アイヒマンと恐ろしく似ていないかと心配しています。

価値観の多様化が進み、ポピュリズムが台頭する現代にあって、ただルールを遵守する日々でよいのか、人としてのモラルを大切にする心との相克にどう対峙すべきかこの歳になってなお模索しているこの頃です。

地域の文化・人材養成の核としての教育学部

静岡大学
学長
石井　潔

同窓会の皆様には、教育学部長時代から長年に渡ってお世話になってまいりましたが、今後はまた別の形で引き続きよろしくお願い致します。

今年度の入学式では、卒業生特別講演を、同窓会のご推薦により清水真砂子先生（翻訳家・児童文学研究者／昭和39年度教育学部英語科卒）にお願い致しました。「正しい答えを求めるのではなく、適切な問いを発することのできる人になって欲しい」という趣旨のたいへん意義深いお話しをいただくことができ、良い方をご推薦いただいたことを心から感謝申し上げます。

清水先生の自叙伝「青春の終わった日」は、静岡県の農村（現掛川市）出身の一女性が、戦後、本学での学生生活を含む青春時代をどのように過ごしたかについての貴重な記録です。先生の一回り上のお姉様は、島田の青年師範をご卒業後教職に就かれた方ですが、このお姉様が農村の生活の合理化や新たな文化の紹介に努められた姿を拝見するにつけ、後に著名な研究者となられた清水先生自身も含めて、師範学校、教育学部の出身者が当時いかに地域を代表する知識人として先導的な役割を果たされてきたかがよくわかります。

教育学部の将来についてはさまざまな議論が行われていますが、地域の文化の担い手、人材養成の核としての伝統の継承の上に立った魅力的な学部・大学院の在り方を模索したいと考えておりますので、ご協力・ご支援よろしくお願い致します。

教育学部の強みづくり

静岡大学
教育学部長
菅野　文彦

平成31年3月までの任期で教育学部長に再任されました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

28年度の二専攻（初等学習開発学専攻、養護教育専攻）新設など、教員養成課程の改革は徐々に進行しています。特に、全ての教員に必要な基礎的・基盤的能力とともに、それぞれ個性的な強みを持った教員を輩出し、着任後もその強みを伸ばしたり増やしたりし続けていくことが重要と考えて、現在、学部学生の主体的な選択とキャリア設計（強みづくり）を重視し、所定の実習以外にも学生の強みに応じた形態での学校現場体験を入れ込んだり、学生の経験値に応じて座学・省察的な授業科目の内容や配置を見直したりするなど、新たな「教職キャリア形成プログラム」構築に力を入れています。

文科省に昨年設置された「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」から間もなく結論の方向が示され、厳しい改革課題が提起されることが予想されます。これまでの成果を踏まえながら、積極的な対応に努めてまいります。

同窓会の皆様方には、従前の心強いご支援に深く感謝いたしますとともに、今後とも変わらぬご理解とご助力のほどお願い申し上げます。

目次

巻頭言……杉田　豊　2
あいさつ……石井　潔　3
菅野　文彦　3
総会報告……露木　公人　4
支部だより……山田　恵三　5
平山　正人　5
飯田　一貴　5
後輩教員へ……池谷　聡美　6
角川　重晴　7
実践記録……堀内　祥行　8
梅田　晃　9
大学の活動……内田　恵　10
伊藤　文彦　11
附属学校・園の紹介　小南　陽亮　12
澤入　基裕　13
情報モラル教育……塩田　真吾　14
同窓会活動……事務局　15
会員だより……菅尾　智也　16
中村　洋介　16
平尾枝里香　16
児島　裕人　16
望月　孝太　17
佐藤　容子　17
若杉美紗子　17
清水　佳歩　17
著作紹介……坂本　雅子　18
鷲巣　錦司　18
同期会及び交流会…青山　辰巳　19
梶田　寿幸　19
同窓会役員名簿……20
同窓会　支部事務局一覧……21
決算報告・予算・事業計画……22
米寿慶祝者一覧表……23
逝去……23
同窓会総会のお知らせ……23

学ぶ意欲を高める英語授業のあり方

掛川市立
大須賀中学校教諭
梅田 晃
（平成16年・英語科卒）

ここでは、静岡大学教職大学院のカリキュラムの一環として取り組んだ、K市A中学校（以下、A中学校）におけるアクションリサーチ研究の実践について述べる。

研究開始のきっかけ

A中学校は市街地から東に10キロほどの場所に位置しており、周囲を豊かな自然に囲まれている。他地区と同様、少子化のあおりを受け、近年全校生徒数は百名前後で推移しており、市内で最も小規模な中学校となっている。このため、子どもたちは町の将来を担う地域の宝であり、住民たちの学校教育に対する期待が非常に大きい。A中学校の授業にはさまざまな地域ボランティアが参画している。

このような地域において、近年英語教育に対する期待が高まっていた。グローバル化が進む社会において、企業家を中心に、英語の重要性が地区集会の場でたびたび話題になっていたという。地域のこのような思いが筆者の元に届き、A中学校生徒の英語力向上のため、当時の二年生を対象に英語短時間学習の指導に当たることになった。

英語短時間学習の実践に向けて

生徒の英語学習に対する意識を調査するために、質問紙調査を実施した。この結果、「英語を使えるようになりたい」「英語の勉強は大切である」「進路や将来の仕事に役に立つ」と、英語の意義に肯定的な考えを抱いている生徒が8割以上いる一方で、「英語の勉強が好きだ」「英語を生かして将来仕事をしたい」と答える生徒は4割程度以下であった。このことから、生徒の英語に対するあこがれや学びたい気持ちは高いものの、実際には英語学習が思うようにうまくいかず、困難を抱えている者が多いことが分かる。

また、それぞれの英語技能への意欲に関しては、「外国の人の話を理解したい」「メディアからの英語を理解したい」などの「聞くこと」に関すること、また、「外国の人と気軽におしゃべりしたい」という「話すこと」に関することに対して、向上意欲が高いことが分かった。

このため、筆者がまず取り組むべきことは、生徒たちの英語に対するバリヤーを低くすることであると捉えた。そこで、Edward. L. Deci（一九九九）が提唱する、動機づけを高めるための三つの心理的欲求」である「自律性の欲求」「有能性の欲求」「関係性の欲求」を満たすための学習活動を、短時間学習に取り入れることにした。自律性の欲求を満たすために「課題遂行型言語教育」、有能性の欲求を満たすために「一年時からの復習」、関係性の欲求を満たすために「協働学習」の三つを軸に、学習をデザインすることにした。また、発達障害などの理由から英語に限らず、学習すること自体に困難を抱えている生徒を支援するために、モジュール学習をユニバーサルデザイン化することも同時に意識した。さらに、英語学習に対して消極的な傾向にある生徒の状況を考え、「苦手を克服するよりも得意をさらに伸ばす」「生徒の思いを大切にする」ことを重視し、生徒が質問紙調査の中で明らかにした「聞くこと」「話すこと」に関する技能向上への強い思いを考慮して、最終的なゴールを「英検3級程度の対話力を身に付ける」と設定し、生徒の英語を学ぶ意欲の向上をめざした。

英語短時間学習の実践

英語短時間学習の流れは表の通りである。まず、15分間の山場となる課題を「一分間対話活動」と設定し、生徒は事前に準備をしない、即興的な英語のやり取りを行った。山場の課題に向かって、本時のトピックの確認、対話の参考にするためのリーディング活動（Intake Reading）、ターゲット文の確認を行う。一分間対話活動の後は、ペアで自分たちの対話を書き出すことで振り返り、ペアで解決できなかった疑問をグループで教え合い、最後にまとめを行う。

英語短時間学習の流れ

内容	時間配分
（1）本日のトピック紹介	30秒
（2）Intake Reading	2分
（3）ターゲット文の確認	1分
（4）1分間対話活動	1分
（5）振り返り①（ペア）	3分
（6）振り返り②（グループ）	5分
（7）本時のまとめ	2分30秒

成果と今後の展望

生徒は大変意欲的に英語学習に取り組み、英語に対する大幅な意識改善が見られた。第一回質問紙調査で「英語の勉強が好きか」という質問に対して肯定的な回答をした生徒は16名（44％）であったのに対し、第二回質問紙調査で「英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた」という項目に対して肯定的な回答をした生徒は33名（92％）であった。また、観察生徒8名の内、5名において対話力の向上が見られた。

今後は、通常の英語の授業において短時間学習で用いた理論を取り入れながら、生徒の英語を学ぶ意欲を保ち、生涯にわたって英語を学びたいと思う生徒の育成に努めていきたい。

小学校英語の導入とその方向性

静岡大学教育学部教授
内田　恵

グローバル化がますます進む今日において、使える英語の学習が話題になっています。そこで教科となる小学校における英語学習の展望と、私たちが試みようとする取り組みについて、述べてみたいと思います。

「話せる英語」への方向転換

「読む、書く、聞く、話す」の英語四技能のうち、過去に「話す」以外の要素が重要視されたという事実は、その時代に合致したものでした。すなわち、世界の先進的地域からの新しい知識導入や知見拡大をするためのツール（道具）として英語が使われたのです。私たちは英語を通して「考え創造する力」を無意識のうちに養成しました。

「話す」技術を磨くことが急務になった現在、この伝統は継承されるのでしょうか。新指導要領では「話すこと」という目標の中に「やりとり」と「発表」という項目設定をしたことが特筆されます。ここに、外国語活動や英語教科化は、実は総合的な思考力や判断力の伸長へ貢献できる土台作りをも担う意図が潜在しているように思われます。

小学生にとっての英語とは？

円滑に英語を習得させるのには、学習開始年齢の問題があります。外国語活動低年齢化の最大の利点は、（教わる行為を少なめに）自然に英語を習得するのに理想的な年齢に、より近づいた点です。母語である日本語習得と同じとまではいかないものの「聞くことを手始めに、めんどうなことは避けて英語に慣れること」が最重要になります。

ところが母語は生活言語ですが、日本では英語を日常使用する状況は稀です。そこにかえって「好き嫌いを言う余裕」が生じるわけです。三、四年生が英語に出会う時に、「嫌いを作らない」で「自然に」英語になじむ生徒が増えることを期待します。

工夫例として、「好きな物(人)を英語で言ってみよう」という活動は、ｂｅ動詞使用だけでは楽しく幅のある会話は成立しにくいので、ｌｉｋｅのような一般動詞も活用します。「外国語で活動する」動機づけには、慣れれば定着する難しめの英単語は積極的に教えるべきだと言えるでしょう。

次に「高学年における英語教科化」について考えてみます。過去数年間はこの時期に「外国語活動」を行ってきましたが、「言語としての英語」を意識して学習することによる思考力の養成に配慮しています。議論の余地はありますが、中学校における指導項目の一部を移行させるという試みが、一貫性のある安定的な方策であると思われます。

一例をあげてみます。英語の代名詞は、形態変化（格変化）が起こります。英語の母語話者は自然な習得が可能ですから、代名詞の格変化を無意識に習得します。ところが外国語としての英語学習には、効率的な順序立てが必要となります。中学校の英語も視野に入れた「基本→拡張」への道筋を明確にしていくわけです。英語の楽しさを味わいつつ、体系的に学ぶことが新知識獲得への興味の増大につながってほしいものです。

また、「やり取り」を意識した指導には、内容を問うための疑問文を早く指導することが望まれます。この型の疑問文は応用範囲が広く、授業の幅と深みが出ます。反復練習と自由な応答学習を実践することが、「英語で発言・発表する」行動の基礎となります。

連携教育をめざして

最後に、「小学校英語教材の開発」と「英語に強い小学校教員育成」についての取り組みを紹介します。

昨年度より附属静岡小学校において、英語教科化への準備アプローチを開始しました。附属小、附属中、教育学部（内田・矢野淳教授）が意見交換を定期的に行っています。二月と四月には、長田敬司教諭（附属中）が小学生にモデル授業を実施し、それに基づいて中学校との連携を意識した意見交換の場を築きつつあります。公立学校の先生方と意見交流を深める場を模索しながら、授業内容や授業方法に関する小中の連携的研究に加速度をつけて、教材モデルなどを提示できるまで事業を推進していくつもりです。

また、三月には西伊豆町教育委員会と本学部英語科（亘理陽一准教授）の共同プロジェクトとして、小学校低学年および中学年向けの指導計画書を作成しました。西伊豆町の教育関係者の方々に助言していただきながら、本学部の英語科学生も教材作りに参加して、小学校での英語指導法を具体的に学んでおります。

結び

今後の英語授業は隣接学校種を互いに意識した縦型の体系的英語教育に力点が置かれます。「何をどこまで教えて次の学校に生徒を進学させるか」という連携教育の土壌をさらに育まなければなりません。英語授業の小学校への進出は、社会ニーズに対応した大学までの英語教育の根幹となっていくことを期待します。

前附属静岡中学校校長
日本英文学会中部支部支部長

デザインの力

静岡大学教育学部教授
地域学部長
伊藤文彦

私は、教育学部に着任して31年目に入りますが、一貫してデザイン・プロセスと発想法を研究しております。デザインの領域は企画から制作まで、幅広い領域に及びますし、デザイン対象そのものは、ロゴマークからプロダクト、建築やイベント、デジタル表現に至るまで、多岐にわたっています。こうした中で、私自身の教育、研究をお伝えするには、私の研究室の卒業生や在学生達の活躍する最近の話題をご報告するのが最も皆様に関心を持っていただけるのではないかと考え、それらをご紹介させていただきます。

篠原宏一氏（２００７年院卒／（株）丹青社勤務）は、文化施設空間のプランナーとして活躍しておりましたが、２０１６年、ふじのくに地球環境史ミュージアムのプランナーとして、日本空間デザイン大賞や世界のデザイン賞を受賞されました。全国で課題とされる廃校のリノベーションに対する教育・文化的価値を評価されました。

竜沢賢吾氏（２０１２年卒／（株）博報堂アイ・スタジオ勤務）は、Ｗｅｂを始めとするデジタル分野で活躍しておりましたが、２０１６年、日本の若手クリエーターの大会で金賞を受賞し、日本代表としてカンヌで開かれた世界大会に出場してきました。トヨタなど一流企業のＷｅｂ広告を手掛け、広告業界の先端的な場面で活躍しています。

長谷川広典氏（２０１７年院卒／（株）読売広告社勤務）は、在学時代の２０１３年、二科展ポスター部門で大賞を受賞し、以後連続して二回特選を受賞。今年度は募集に対して約５００倍の狭き門の就職試験を突破しました。（おおや57号表紙）

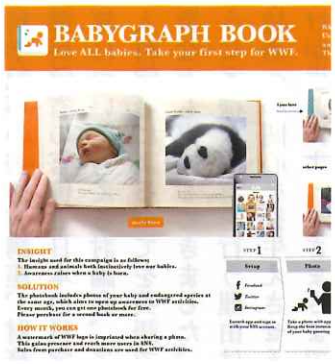
内山晃輔氏（４年次在学中）も同様に、２０１６年、二科展ポスター部門で大賞を受賞しております。（おおや60号表紙）

さて一方、在学生はといえば、最近の教育方法として注目されるＡＬやＰＢＬを中心に据えた「連携」プロジェクトを積極的に行なっています。

２０１６年４月から始まった産学共同研究「医療器具のデザイン化への研究開発」においては、研究室の３・４年・院生９名が、地元の金属加工メーカーと共同して、医療器具の「柄」の部分のデザインに取り組みました。医療機関へのヒヤリングや３Ｄプリンタ出力を外注するなどして、精度の高い試作品を完成させ、今年度の全国数カ所の見本市でも公開される予定です。

２０１６年８月には、ポーランド・ワルシャワ工科大学建築学部生12名が、築３８０年経過する古民家（磐田市の私の実家）を計測してコンピュータシミュレーションし、日本の文化を探るといったプロジェクトが行われました。これに合わせ、私の研究室の学生12名がジョイントして「デザインの未来」について考えるワークショップを、視覚的なコミュニケーションを駆使して行い、言語や文化を超えた有意義で楽しい交流が行われました。

以上のように、研究室の学生達は、従来の教育学部の枠を超えた教育環境において、「デザインの力」を学び、社会人となった卒業生達は、度々研究室に戻ってきては、後輩達にプロとしての「デザインの力」をアドバイスしてくれる循環ができたことが、現在のわが研究室のエネルギーとなっています。



動物愛護コンペ金賞受賞作（一部）
（滝沢賢吾　作）

ミュージアム（ポストカードより）
（篠原宏一　企画）

ワルシャワ学生とのジョイントワークショップ
（於：掛川市　加茂荘）

医療器具デザインの３Ｄ画像
（作成：㈱エクタス）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

伊藤文彦（略歴）
１９５８年静岡県磐田市生まれ。１９８６年筑波大学芸術学研究科博士課程単位取得退学。同年静岡大学教育学部助手として着任。２００７年より現職。２０１０～１２年附属静岡小学校校長を兼任。専門はデザインプロセス研究。静岡大学ロゴ・スクールカラー、ラッピングバス・タクシー、美術館ポスター、「お茶のまち静岡市」のデザイン等を幅広く手掛ける。

「自分ごと」として考えさせる情報モラル教育

静岡大学教育学部准教授
塩田真吾

これまで、学校における情報モラル教育というと、通信事業者や専門家を招いての講演会という形式が多く、その内容は「こんなトラブルがありますよ」「こんなトラブルに気をつけてくださいね」というトラブル事例の紹介と注意喚起が中心でした。しかし、こうしたトラブル事例を紹介する講演会では、「トラブルがあるのはわかるけど、そんなの自分には関係ないし」と子どもたちが感じてしまい、当事者としての自覚を持ちにくいという課題がありました。

例えば、ネットでの炎上事件を紹介し、「不適切な写真をアップしないようにしよう」と指導しても、子どもたちは「はい、不適切な写真はアップしません」と答えるでしょう。ここでの問題は、「不適切な写真」とは何かが、指導者と子どもたちの間でズレていることにあります。同様に、「スマホに依存する人が増えているから、夜遅くまで使いすぎないようにしよう」、「ネットでのいじめが増えているから、SNSで悪口を言ったり、嫌なことをしないようにしよう」と指導しても、「夜遅く」「使いすぎ」「悪口」「嫌なこと」などは曖昧な言葉であり、大人と子ども、または子ども同士でも認識に「ズレ」が起きやすくなります。自分は夜遅くないつもりでも相手は夜遅いと思ってしまう、自分は悪口とは思っていなくても相手は悪口と思ってしまう、という「ズレ」を考えさせ、そこを議論させる必要があります。

どうすれば、「自分のこと」として考えられるか

私の研究室では、二〇一四年度からLINE株式会社と共同研究を行い、「トラブル事例を伝える」という情報モラル教育ではなく、子どもたちに「もしかしたら、私もトラブルを起こしちゃうかも…」という「当事者としての自覚」を促すことを目的とした教材の開発を行っています。

教材では、指導の曖昧さを扱い、「嫌なことってなんだろう」「不適切な写真ってなんだろう」ということをカード型の教材を使って、他者と比較しながら考えさせます。例えば、「自分とみんなの嫌なこと」というワークでは、①すぐに返信がない②なかなか会話が終わらない③知らないところで自分の話題が出ている④話をしている時にケータイ・スマホを触っている⑤自分が一緒に写っている写真を公開されるという五つを、嫌な順に並び替えて、グループで共有し、議論します。実際の授業では、「私は自分が一緒に写っている写真を公開されることは全然平気だったけど、一番嫌だって思う人もいるんだ！もしかしたら、今までやっちゃってたかも…」という声を聞くことができます。

私の研究室では、こうした指導方法を「カード分類比較法」と呼び、自分と他者との感じ方のズレをカード教材を通して考えさせ、議論させることにより、子どもたちにトラブルを自分のこととして自覚させることができると考えています。「不適切な写真とは何か」「使いすぎとはどのような状態か」をカード分類比較法を用いて他者と比較、議論することにより、自分も不適切な写真を公開していないか、自分も使いすぎていないかという自覚を促すことが期待できます。

さらに二〇一六年度は、「当事者としての自覚」の次のステップとして、自らリスクを予想し、それらを回避する力を育てる「リスクの見積り」をテーマとした教材を開発しています。

トラブル事例の紹介から「考え議論する」へ

ネット上のコミュニケーションのトラブルでは、「こうすればすぐに解決できる」といった指導は難しいのが現状です。「トラブル事例の紹介」「危険性の啓発」という安易な指導法ではなく、どうしたら子どもたちに問題を自分のこととして自覚させるかという視点で、「考え、議論する情報モラル」の指導法を今後も研究していきたいと思います。

なお、ここで紹介した教材は、以下よりダウンロードすることができます。

https://line.me/safety/ja/workshop.html

事前面接指導の成果と課題

「えっ、静大生の教員採用率が、こんなに低いの？」「教育学部生なのに教員採用試験を受けない学生が多いのはどうして」。この現状に危機感を抱いた同窓会では、一人でも多くの教育学部生が、教員になってほしいという切なる願いで、平成22年度より同窓会ＯＢによる第一次前面接指導、第二次前面接指導を実施してきた。その結果、徐々に採用率は高まってきたものの、教員を希望する学生の減少で、絶対数は伸び悩み状況にあり、現状を打破するために、平成27年度より、採用試験に合格した学生と面接官そして同窓会本部役員による課題解決に向けた懇談会を実施した。

杉田豊　同窓会長の願い

杉田会長は、「自分が教採試験を受ける頃は、誰もが合格できたが、最近は厳しい状況にあるけれど、同窓会員には是非、教員を目指す頑張りを期待する。本日は、狭き門を乗り越え、採用試験に合格した学生から生の声を聞き、今後の面接指導に生かしたい」と挨拶があった。

平成29年度教員採用試験の総括

平成25年度に教育学部に設置された「教職支援室」の渡邉特任教授は、

・教職支援室を利用し、同窓会の面接指導を受けた学生の合格率は高い。
・一人でも多くの学生に参加してほしい。静岡県・静岡市・浜松市・他県採用など、全てに対応できる体制をとっている。
・同窓会の配慮で他学部生徒も指導を受け感謝されている。

と説明され教職支援室の活用で、教採試験を希望する学生の増加を期待している。

次の表は、平成29年度教員採用試験の静大生の結果である。

県・市	校種別	受験者数	二次合格
静岡県	小学校	４３	３０
〃	中学校	２７	２２
〃	高校	２０	８
〃	特別支援	１５	１４
静岡市		３９	２０
浜松市		２０	１１
他県		２５	１３

表から読み取れる課題

・教育学部生の半数以上が教採試験を受験しない状況にある。
・小学校教員希望者が少ない。
・合格率は高いので、教員を目指すというモチベーションを高めてほしい。

面接講師による指導の振り返り

平成28年度も、面接指導を教職経験豊かな約20名の同窓会ＯＢの皆様方にご指導をいただいた。懇談会には2名の方に参加していただき、感想等を述べていただいた。

久保田柾博面接講師は、「指導は五回目となるが、学生の努力は年を追うごとに向上している。教職支援室の利用回数の多い学生は、受ける姿勢も受け答えの内容も驚くほど立派である」と説明された。

また、塩沢英雄面接講師は、「本年度は、30分という面接時間で、多岐に亘り質問できた」「言葉の意味を自分のものとして具体的に表現できない」という課題や「自分自身を良くしたいという意識が見えた」など説明があった。

教採試験に合格した学生より

（加藤）温かな雰囲気での指導で安心感があった。教職支援室の面接で課題が明確になり、同窓会の面接ではその課題を意識して受けることが出来た。

（髙林）抽象的でなく浜松市の子どもプランを取り入れた指導でよかった。板書指導では字だけでなく板書構想の重要さを実感できた。

（大橋）市独自の「小中一貫教育」について伺えてよかった。話し方など課題をいっぱい指摘されたのが本番で生かせた。

（山下）面接形式の練習とその後の評価と指導が充実していた。学校現場での経験談が役に立った。

（菅井）とても充実した指導をいただいたが、面接指導のコンセプトなどが講師間で共通認識されているのか疑問に感じた。

次年度に向けた要望等

（加藤）現場での経験談が伺えてよかったが、試験当日は面接官には役割分担があるのか。

（髙林）講師の先生に採用したい人物像などを伺いたい。本番さながらの厳しい指導を期待する学生も多い。学生は打たれ強い。

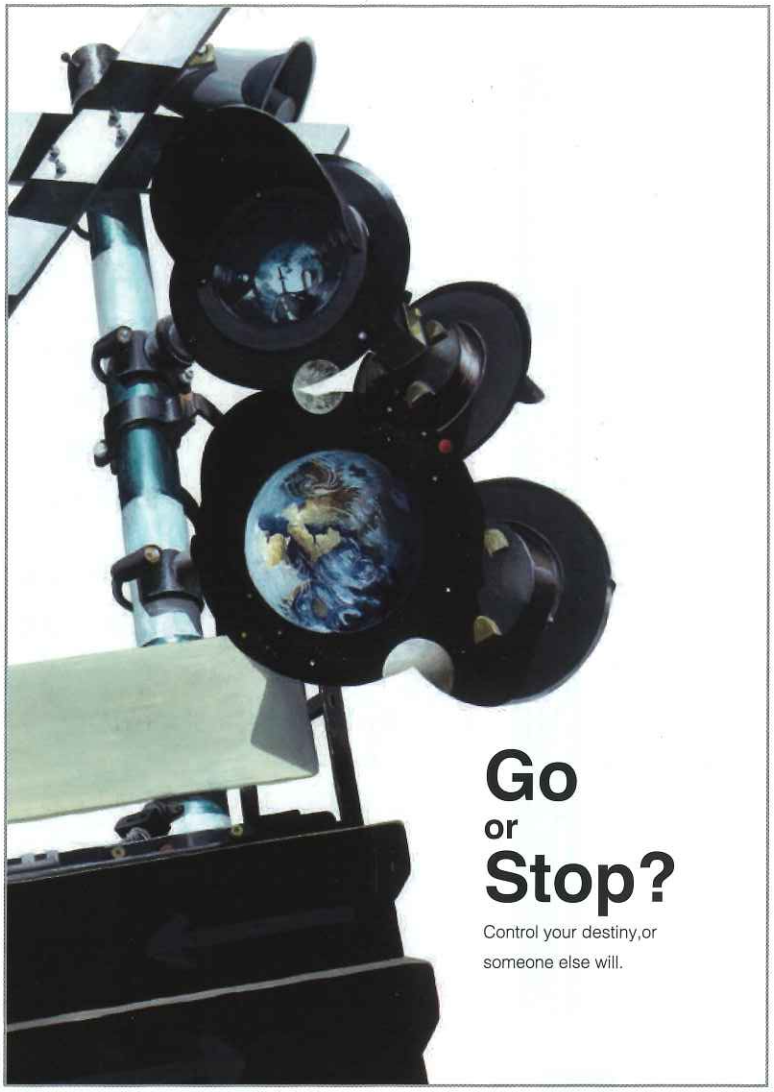
（大橋）本番的な捉えをしたいので実戦形式で行ってほしい。

（山下）時間の延長と回数を増やしてほしい。教職支援室が混み合い予約が取れにくい。

全体を振り返って

参加された横山教授や冬木教授から、学生の中に「教員としてやっていく自信がない」「授業が忙しく試験勉強が出来ない」などと話す者がいたと言われた。また、面接講師は、「学生の**教師になろう**という意識は高いと感じた」と期待する声も多かったので、絶対に教師になるんだという気概を持ち続けてほしいと強く思った。同窓会は、一人でも多くの学生が教職を目指すことを願っている。

（同窓会事務局）



作者　プロフィール

内山（うちやま）　晃輔（こうすけ）
（芸術文化課程　4年）

表紙作品　「Go or Stop? No.1」

私たちが信号機に従い行動するのは今では当たり前の光景です。しかし、無意識に信号に反応し集団で行動するその光景は、何か機械的で不気味なイメージを持ちます。ジャック・ウェルチの「自分の運命は自分でコントロールすべきだ。さもないと、誰かにコントロールされてしまう。」という言葉のように、ただ無意識に信号機に従うだけではなく、自分の目で周囲を見て自分の意思で行動することが大切なのではないでしょうか。

2016年度　第101回　二科展 デザイン部A部門　大賞　受賞作品

裏表紙作品　「Go or Stop? No.2」

踏切のレンズに反射する身近で日常的な風景と、それと対比させた地球を同じレンズ内に表現し、同じものでも見方によって変化が生じることを表現しました。

○平成28年8月31日～平成28年9月12日に行われた第101回二科展・デザイン部A部門（大賞1点　特選3点　奨励賞4点）において、大賞を授与された栄誉と、それに伴い本学の名誉を高めた功績に対して、平成29年3月6日、静岡大学より学長表彰されました。

静岡大学教育学部同窓会誌60号
「おおや」　平成29年9月1日発行

発行　静岡大学教育学部同窓会事務局
〒420-0856　静岡市葵区駿府町1-12　静岡県教育会館内
☎ 054－253－6318　FAX 054－253－6334

制作　八千代印刷株式会社
【編集部】　林　のぶ・鈴掛純也・豊田邦子・長谷川敬剛
丸山久代・松永　仁・加藤順子